

信号はなぜあるのか、を問い続けて……

東京都／長谷智喜・かつる夫妻

「元気に挨拶を交わしながら横断歩道を渡る下校途中の小学生たち。その姿を、橋の上の小さなお地蔵様が優しい眼差しで見守っています。」

東京都八王子市、上川橋交差点。24年前、爽やかに晴れ渡った11月の朝、この小さな交差点で、横断歩道を渡りきることができないまま天国へ旅立った少年がいました。

長谷元喜くん。当時5年生で11歳だった元喜くんは小学校に向かう途中、横断歩道の上で、左折してきた大型ダンブにひかれたのです。仲良しのお兄ちゃんと一緒に通学していた3年生の妹は、一歩先に渡りきっていて無事でした。

葬儀から数日後のこと、頑丈な肩ひもが無残に引きちぎられたランドセルが、警察から両親のもとに返されました。ふたを開けると、教科書や筆箱と一緒にポリ袋が入っています。中から出てきたのは、学校で使うはずだったトランプ大のカード。そのうちの一枚には元喜くんの手書

事故から10年後に「歩車分離信号」になった上川橋交差点に立つ夫妻。青信号で歩行者が横断する間、すべての車が赤信号で停止する歩車分離信号は、右左折車と歩行者が交差する危険がない。

2016年3月末現在の歩車分離信号8,734基、信号機全体の約4.2%。



きの文字でこう綴られていました。

『信号はなぜあるのか A 信号がないと交通事故にあうから』

父親の智喜さん（63歳）は、そのときのことを振り返ります。

「そのカードを見たときは、妻とふたり、涙が止まりませんでした。元喜の声が聞こえてくるようでした。

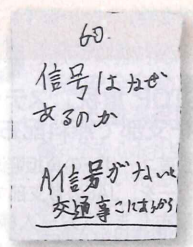
『お父さん、僕はちゃんと青信号を守って渡っていたよ。でも、みんなこうやって殺されているよ。このままだと大切な命がどんどん失われていくんだよ』という声が……」

もちろん、ドライバーが横断歩道の前で止まってしつかり確認すれば、この種の事故は起こらないはず。しかし、不注意による同様の巻き込み事故は全国各地で繰り返し発生しており、その実態を調査すればするほど、歩行者が危険にさらされている交差点の構造に疑問を持つようになった、と言います。

「そのとき、涙を流すのは後にしよう」と決意しました。そして、歩行者が青信号のとき車がすべて赤信号になる『歩車分離信号』の普及活動に

取り組み始めたのです（智喜さん） 署名、陳情 講演 海外視察……、夫妻は時間を惜しんで駆け回り、1999年には『子どもの命を守る分離信号』という本を上梓。そして2002年、ついに国が動きまします。警察庁は上川橋交差点を含む全国100か所の交差点で歩車分離信号の試験運用を開始。その結果、人対車の事故が約7割減るなど大きな効果が見られました。しかし、全国的に見れば普及率はまだ十分とは言えないのが現状です。

母親のかつるさんは語ります。「こんな悲しい思いをするのは、もう私たちだけでたくさん……。せめて通学路は、子供たちが安心して渡れる交差点になってほしいですね。『信号はなぜあるのか？』その問いは、元喜からの宿題だと思っています」



元喜くんのカード。「上川のいのちの日」として、11月には命の重さを学ぶ授業が毎年行われる。